



Vol.203

March 2022
spring

弘 前 大 学

学園だより

巻頭言 02

特集 卒業・修了・退職にあたって 04

研究室紹介 18

新任教員紹介 20

けいじばんコーナー 21

編集後記 22

巻頭言

ポストコロナの 未来を切り拓け！



弘前大学長 福田眞作

新型コロナウイルス感染症の第6波と平年を上回る積雪に見舞われた冬も終わりを告げ、この津軽の地にも春が訪れようとしています。待望の春は、多くの皆さんの旅立ちの季節でもあります。弘前大学を卒業される学生の皆さんと退職される教職員の皆さんに対し、心からのお祝いと感謝を込めて、送別の言葉を述べさせていただきます。

令和3年度末をもって卒業される学生の皆さん、ご卒業、誠におめでとうございます。新型コロナウイルス感染者が国内で初めて確認された令和2年1月以降、社会に出る前の皆さんの貴重な2年間はコロナ禍とともにありました。授業はもちろんのこと、卒業研究（論文）の完成に至るまでの間、様々な制約がある中でも諦めずに努力を重ね、無事に卒業の日を迎えてくれた皆さんに、まずは心からの感謝と敬意を表します。ありがとうございました、そして本当にお疲れさまでした。

皆さんの大学生活、そして弘前市での暮らしはいかがでしたでしょうか？弘前大学は、「学ぶ街は暮らす街でもある」をキャッチコピーとしています。皆さんが学んだ街、弘前市は、歴史と伝統があり、高い文化の薫りを備え、物価や家賃が安く、そして治安の良い学園都市であったと思います。西側に大きく裾野を広げる霊峰・岩木山や、四季折々に催される全国的なお祭りなど、きっと皆さんの大学生活に安らぎと賑わいを与えてくれたのではないのでしょうか。コロナ禍の制限の下ではありましたが、地域の課題に主体的に向き合った経験、大学で知り合った友人・先輩・後輩・皆さんをサポートしてくれた教職員との交流、課外活動、（オンライン）海外留学、そしてアルバイトやボランティア活動の中で知り合った地域住民とのふれあいなど、弘前大学ならではの学びを通して、皆さん自身の成長を実感できた大学生活であったならと願っています。

多くの人々が他者への支援や協力が難しい立場にある中、「コロナに負けるな！」や「ポストコロナの未来を切り拓け！」といった皆さんへの激励と期待を込めたメッセージを添えて、全国のOB・OG、本学の教職員、および地域の方々から、たくさんのご寄附や食料の提供がありました。この寄附金を活用して継続している全国初の「100円昼食弁当・100円夕食」は、すでに11万食を超えています。全国の方々の善意は、皆さんのお腹を満たし、からだの成長を助けただけでなく、皆さんの

心を満たすものだったのではないのでしょうか。善意の第三者の支えがあって皆さんの今があることを、社会人としてあるいは研究者として新たなスタートを切る今、改めて胸に刻んでください。これから皆さんは、社会人として多くの人々と様々な出会いを経験することになります。新たな出会いを重ねる中では、他者への感謝、他者への理解、そして他者との協働を意識しながら、大学生活の中で培った創造性、柔軟性、そして挑戦心をいかに発揮され、ポストコロナの未来を切り拓く若きリーダーとして活躍することを期待しています。

さて、卒業生のおよそ7割の方はここ青森県から旅立つことになります。皆さんが弘前大学の学生として過ごした期間は様々ですが、縁があってこの弘前の地で、そして弘前大学で学んだ年月が、生涯にわたって大切な思い出となることを願ってやみません。もちろん、弘前大学から旅立つとしても、皆さんは弘前大学の同窓生となり、母校との縁が切れるわけではありません。とりわけ、2年にわたってコロナ禍の制約を受けた皆さんには、折りに触れ母校を訪れていただき、キャンパス内や弘前市内を散策しながら、十分にできなかった師弟との絆や学友との友情を深めてくださることを願っています。

今年度末をもって他大学に異動される教員の皆さん、新任地での教育研究の益々のご発展を期待しています。そして、今後の実績が本学でも研究成果に繋がるものであったなら、こんな幸いなことはありません。また、他の大学等から本学に赴任し、このたび定年退職を迎える先生もおられます。他大学での経験や知識をもとに本学の教育研究の歩みの一翼を担っていただきましたことに、心から感謝を申し上げます。

教員と事務職員は、大学という組織の両輪です。本学を去られる事務職員の皆さんには、それぞれの勤務期間内に色々な部署で本学が直面した様々な課題に対応いただいたことと思います。国立大学の法人化やその後の法人評価への対応、学部改組や新規学部・研究科・研究所の創設、産学官連携の推進、そして今回のコロナ禍への対応など、皆さんの献身的なお仕事によって着実に実績が積み上げられたからこそ、今日までの弘前大学の発展があります。最近では、「第3期中期目標期間（4年目終了時）に係る業務の実績に関する評価」において、弘前大学は高い評価を受けることができ、令和4年度から始まる第4期中期目標期間を強い追い風

の中でスタートすることができることとなりました。これまでの皆さんのご功績に対して、歴代の学長を代表して心から感謝の意を表します。さて、皆さんの中には、本学が唯一の職場であった方々もおられます。達成感や満足感をもって弘前大学の職員としてのキャリアを終えることができたでしょうか。本学とともに歩んできた長い経歴の中で経験した様々な出来事が、皆さんの胸に懐かしい思い出として刻まれているとしたなら、こんなに嬉しいことはありません。

2004年の国立大学の法人化以降、この17年間に様々な改革を推し進めた結果として、先に記したごとく弘前大学は「(法人として) 評価の高い大学」として生まれ変わりました。これからも教育研究、医療、ならびに社会貢献の面で、国内外を問わず高い評価を得られるよう、活発な活動を継続してまいります。次に私たちが目指すべきは、受験生・保護者の皆さんや企業の皆さんから選ばれる「評判の良い弘前大学」だと考えています。残念ながら、入学試験における弘前大学の志願者数は年々減少傾向にあり、少子化が急速に進む中であっても「選ばれる弘前大学」となるための改革が必要と考えています。「評判の良い大学」には、「卒業生が社会で活躍している大学」であること、「在校生や同窓生から愛される大学」であること、この二つが共通しています。日本経済新聞による一部上場企業等へのアンケート調査（採用を増やしたい大学部門）において、弘前大学は2018年の第1位に続き、2021年に第2位にランクされています。本学の卒業生が、社会から信頼され、必要とされる人間力を備えた人材として全国で活躍し、本学の評判を高めていただいていることに心から感謝しています。より多くの卒業生の皆さんに母校愛（弘大愛）をもって卒業式の日を迎えていただけるよう、やがて「在校生や同窓生から愛される弘前大学」として認知されるよう、教育研究内容の充実とともに学生サポート体制の強化に取り組んでまいります。

結びに、今年度末をもって本学を去られる学生・教職員すべての皆さんに改めて感謝を申し上げますとともに、次のステージでの皆さんのご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げます。そして、今後とも弘前大学の歩みを温かく見守っていただき、ご声援とご支援を賜りますようお願い申し上げます。皆さんをお送りする言葉に代えさせていただきます。

特集

卒業・修了・退職にあたって



理事(企画担当)・副学長

吉 澤 篤

走り続けて22年

1999年12月4日(土)採用面接を受けるために初めて弘前に来ました。私はジャパンエナジー(旧日本鉱業、現ENEOS)の中央研究所に勤務しており、1995年に管理職となり埼玉に家建て、階段の踊り場で守りに入ったかのような状態でした。ところが、1997年には山一証券が、1998年には北海道拓殖銀行などが経営破綻し、ジャパンエナジーでも事業と研究テーマの選別がなされ、私が担当する液晶材料研究は中止となりました。上司からは「転職先の会社を紹介する」といわれる中で、弘前大学理工学部教官公募に応募したところ、面接の連絡が来た次第です。家内には内緒の応募でしたが、大学で学生さんと一緒に前に向かって走りたいという思いです。

田尻先生が選考委員長を務めておられ、現在の総合教育棟で面接を受けました。面接の感触も良く、その晩、ホテルの前にある居酒屋で熱燗を呑

みながおかみさんと話をしていたら、「青森に県庁を渡すかわりに大学を弘前にもってきた」とのこと。真偽の程はわかりませんが、街の人の想いが伝わってきます。運良く採用となり、2000年4月1日付で物質理工学科機能素材工学講座の教授として着任しました。この時私は43歳。田尻先生が大部屋の片隅にある5人程度が作業できる実験台とそこに隣接した事務机を指して、「このスペースと教授室が先生の研究室です」とのこと。「先生」という呼称にも慣れていませんでしたが、私がイメージしていた研究室との隔たりに驚きました。

幸いなことに、会社からさまざまな実験器具・装置、それまでの14年間の成果である液晶化合物・中間体および研究報告書を譲り受けました。会社の同僚だった二人が来て測定装置をすぐ使えるように立ち上げてくれ、感謝しかありません。また、大学からもスタートを支援していただきました。2001年には物質理工学科の1期生である卒研究生5人を受け入れ、弘前大学での液晶研究が始まりました。彼らが実に良くやってくれ、オリジナルな研究を弘前でやっていけると確信しました。

夏の夕方は中野の50mプールを一人占めし、冬には弘南電車で大鰐温泉に出かけ、雪質の良いスキー場にシュプールを描き、その後は大鰐山荘の温泉です。埼玉では出来ません。また、「学生より先に生まれたからではなく、先に生き活きとしてこそ先生」をモットーに、講義をするのも面白く、水を得た魚のようだと学生時代の先輩に言われました。

苦痛だったのは学科会議と教授会です。

2004年3月には鷺坂先生が助手として着任され、学生も博士後期課程から4年生までのフルセットとなりました。研究も展開し、吉澤教授、花の50代の始まりです。一方、学生ともよく遊びました。懇親会の二次会はスナックで、最後は私が「青春時代」を歌い、気が大きくなってお支払いもするというのがお決まりのパターンでした。

しかし、2012年に理工学研究科長、さらに2014年には企画担当理事を拝命し、苦痛だったはずの管理運営が本務となりました。実験室で過ごす時間は格段に減ったものの、学生の研究報告を聞き、それに対して新しい解釈を考え、次の実験をデザインする楽しさはやめられません。アイデアが生まれるプロセスを学生に見せ経験させることは大学における重要な教育だと信じています。博士課程の学生から「大学の仕事も大切でしょうが、先生は私の先生です」と言われたのは、理事3年目です。

22年間、好きなように仕事をさせてもらいました。これも教職員の皆様、一緒に研究を行った学生の皆さん、附属病院の先生方と看護師さん達、そして家族の協力と支援があったからこそであり、心からの感謝とともに私は退職します。



卒業・修了にあたって

卒業生・修了生のこぼれ

人文社会科学部



文化創生課程

寺本 碧季

自分が予想していた道とは違いましたが充実した毎日でした

大学入学から早くも4年、あっという間でしたが有意義な時間でした。大学では自分の好きなことが学べました。元々外国語に興味があったため、最初は多文化共生コースでヨーロッパの言語を勉強したいと思っていましたが、1年次に日本語学に興味を持ったことがきっかけでいきなり文化資源学コースに希望を変えたり、転ゼミしたり…。ずっと目指していたものと別の道に進むのは不安でしたが、突然変わった目標に向かって勉強を続けることが出来ました。その一方で好きなことを続けるために外国語の授業も受けましたが、ここでも突然「中国語をやりたい」と思い、今まで全く考えていなかった中国語や韓国語に触れました。ゼミでもそうです。4年に上がってから卒業論文のテーマを変え、1からの勉強が始まりました。最終的に五所川原市のアクセントに関する方言研究にまとまり、「まさか自分が方言をやるとは」と思いましたが、それまで卒論を前提に続けていたテーマを含め無駄だと思うことは何もなく、むしろ色々なものに触れられて学びが増えました。思えば入学当初思い描いていた道とは本当に違う場所にいますが、得られた学びに満足できる大学生活でした。先生方、友人、先輩方、後輩の皆、沢山の人の支えられました。本当にありがとうございました。



社会経営課程

小境 亮斗

人に恵まれた大学生活

大学生活を振り返ってみて、4年間本当にあっという間だったなと実感しています。そんな4年間の中で多くの人との出会いがありました。地元（北海道）から初めて弘前に来たときは知り合いもおらず不安でしたが、学生寮に入寮し、まずはすぐに新しい友達を作ることができました。寮の先輩も優しく迎え入れてくれて、とても安心したのを覚えています。普段の大学生活では、授業やゼミ、サークル活動を通して友達を作ることができ、先輩とも親しくしてもらえました。休日には友達や先輩と車でドライブしたり、一緒に美味しいものを食べに行ったりして楽しい思い出をたくさん作ることができました。また大学生になって初めてアルバイトを経験し、働くことの大変さを実感しました。そんな中でも優しくて頼りになる先輩や同期に恵まれ、一緒に楽しく働くことができました。こんなにもいい人たちに恵まれたおかげで、これまで充実した学生生活を送ることができたと思います。この4年間で出会えた方、お世話になった方に感謝の気持ちを伝えたいです。卒業後も大学生活を通してできたつながりを大切に、社会人として日々精進していきたいと思っています。



社会経営課程

佐藤 雅

楽しかった大学生活

弘前大学に入学してからの4年間はあっという間で、もう卒業しなきゃいけないのかという感じです。大学生活は勉強だけではなく、サークルやアルバイト、旅行等さまざまな経験をすることができました。サークルでは先輩や後輩、同期、アルバイトでは幅広い年齢層の方と関わりをもつことができ、4年前と比べると少しは成長できたのかな、と思います。

今の気持ちとしては、卒業論文の執筆や就職活動がなんとか終わりほっとしています。そして、まだ卒業したくないという気持ちと新たな社会人としての生活にワクワクしている気持ちが半々です。新型コロナウイルスの影響により大学生活の後半から活動が狭められてしまい大好きな旅行ができなかったのが心残りですが、全体としては楽しく過ごすことができた4年間でした。この大学生活を送ることができたのは、友達やサークルのみんな、卒論を支えてくれた先生、両親のおかげです。大学での経験を活かして、新社会人頑張ろうと思います。ちなみに気に入りの学食は冷やし担々麺で、生協コンビニではシュークリームが好きでした。笑



学校教育教員養成課程

浅瀬石 明里

学びと出会い

地元、この弘前が好きで弘前大学に進学を決めた高校時代。そして4年前の合格発表。それから始まった弘前大学でのめまぐるしい日々は、わたしにとってのかけがえない出会いと挑戦の連続だった。特に、後半の2年間では、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、留学の中止や所属する弘前大学フィルハーモニー管弦楽団の演奏会中止など、今思い出してみても悔しい、切ない思い出たちもある。しかしそんな中でも、楽しさを見出し、今しかできないことを追求し続けることができたのは、手を差し伸べてくれる仲間たちがいたからだろう。教員採用試験に向けて学ぶ上でも、同じ目標に向かう仲間の存在はとても大きく、同じ空間で学び合えたことを誇りに思う。この大学での学びや体験、出会いはこれからの人生をきっと豊かにしてくれるだろう。春から始まる教員生活では、この思い出たちと教員としての責任感を胸に、子どもたちが夢に向かって羽ばたくためのサポートをしていきたい。

最後に、お世話になった先生方、一緒に泣いて笑った同期や先輩、後輩、そして22年間支えてくれた家族へ、心からの敬意と感謝を。ありがとう。



学校教育教員養成課程

岩谷 里沙子

大学4年間を振り返って

大学生活を振り返ってみると長いようで短い4年間だったと感じます。浪人をして入学した私は、授業について行けるのか、周りの人と上手くやっていけるのか等、沢山の不安を抱えていました。結果的には、周りの人に恵まれ、お互いに助け合いながら充実した大学生活を送ることができました。

特に印象に残っている思い出といえば、やはり教育実習です。もともと人前で話すことに自信が無かった私は、2週間の集中実習と後期Tuesday実習をしっかりやりきれるのか不安に思っていました。しかし、友達と模擬授業をやり合ったり、教科担当の先生にアドバイスをいただいたり、同じ配属学年や国語科の仲間と助け合ったりしながら進めていき、無事に終えることができました。

他にも、サークルやゼミ、アルバイトで、失敗したことや後悔したこと、うれしいこと、楽しいこと等、様々な思い出があります。これらは、支えてくれた家族や友達、国語科の仲間、先生方のようなお世話になった方々のおかげです。本当にありがとうございました。そして、これからもよろしくお願いします。



学校教育教員養成課程

若林 紀亜

変わることでできた4年間

4年前の受験で初めて訪れた、雪国出身の私も驚くほどの雪が積もっていた弘前。その光景が昨日のことに思えるほど短く感じる4年間でした。この大学生活を支えてくれたのは、家族をはじめ、学部友人や先生方、部活の人々、寮生など多くの人です。特に専攻の同期は、試験や実習を共に乗り越えてきた仲間であり、自分の弱い部分さえも受け入れてくれるような安心感がある人達でした。彼女たちと関わることで、誰しも良い点と弱点を持っているものなのだと意識しはじめ、自分の苦手なことにも向き合えるようになりました。先生には、子供と接する場面で「今どこ見てる?」と言葉を掛けられました。これにより、なにかヒントはないかと人を観察することが増え、目の前の人をよく知るといふ、教育に携わる上で大切なことを学べたと思います。さらに実家を離れたことで、家族の偉大さや有り難みにも気づくことができました。

思い返してもやはり、自分は周りの人に恵まれていて幸せ者でした。遠かったけど弘前大学に来てよかったと心から思います。これからも周りの人に助けてもらいながら、なんとかやっていきます。今まで関わってくださった方、ありがとうございました。



医学科

菊池 諒一

卒業へのカウントダウン

“29歳学生”という友にニヤつかれることのある肩書きに悩まされるのもあと数ヶ月となってきた一月某日。風呂でもキッチンでも考えているのに、この原稿がまだ終わっていないことに正直焦りを感じている。書ける月並みな話題は二三あるものの、面白みのない普通の思い出を書いてどうする…とつい考え込んでしまう。キーワードに二重の意味を掛ける手法でいくか？いや、もっと誰も書いていないようなスタイルはないか？と色々思案してみたものの一向に妙案は浮かばない。ひとしきり私の苦悩を記してきたが、この駄文に果たして意味はあるのか？と問われようものなら胃に穴が開きそうになる。

いいんです。十数人の学生に卒業に際しての想いを綴らせれば、こんな自由な投稿も生まれます。大学は自由な学び舎であり、窮屈な校則も服装指導もないのだから。

さていい加減話をまとめよう。6年間通った道は厚い雪で覆われ、一層春からの新天地での生活が待ち遠しい。弘前を離れるという寂しい気持ちもあるが、それよりもついに医師になれるという喜び、そして緊張感を感じている。一から、がむしゃらに頑張ります。乱文にお付き合いくださりありがとうございました。礼。



医学科

寺田 侑真

終わり良ければ全てよし

医師を志し、故郷の滋賀県を離れ早6年が経とうとしています。6年前の冬の日、初めて降り立った弘前の地でスマホの電源が落ち、試験会場の下見から宿泊するホテルへの帰り方も分からず、寒空の下道に迷いながら途方に暮れた日が遠い昔になってしまいました。そんな笑い話を抱えながら入学した弘前大学、決して楽しいだけの日々ではありませんでしたが、遂に医師として働ける日が目前に迫ってきました。

頭脳も精神力も凡庸で、真面目だけが取り柄だった自分には次々に押し寄せる課題・試験の波を効率良く乗り越えられるわけもなく、ただひたすらこなすだけで精一杯。人間関係が上手いかず、全てをなげだしたくなる日もありました。おかげで凡庸だった自分も医師としてのスタートラインに立たせていただけるぐらいに頭脳も精神力も鍛えられ、そして共に支え合い過ごした友人、お世話になった先輩や後輩と貴重な思い出を作ることができました。決して華やかな学生生活だったとは言い難いものですが、自分にとっては充実した学生生活で、これからの人生の糧にしていきたいと思います。

6年間、お世話になりました。春から、これまで以上に精進していきます。ありがとうございました。



医学科

山田 園子

卒業に寄せて

新年を迎え、早くも1ヶ月が経とうとしている。このごろは、国家試験に向けた勉強をしつつ、転居に向けた準備も少しずつ始めている。部屋を片付けながら、昔の教科書や資料を久々に手に取って眺めていると、当時の自分が苦しんだ痕跡があちこちに見つかる。とある教科書には、おそらく先生に質問しようとしたのだろう、「基底嵌入にイオンポンプはある？」と殴り書きされた付箋が貼ってあったが、今となっては何のことやら皆目不明である。しかし、手探りながらも無我夢中で勉強した感覚だけは、じわりと蘇ってきた。

作業を続けながら、入学当初の自分を思い返してみた。当時と比べると、今では好みも考え方も幾分変わったように思う。この変化は、ひとえにこの6年間で出会った方々のおかげでもたらされたものであろう。ご指導いただいた先生方、病気の話題に止まらず人生経験まで聞かせて下さった患者様方、出不精な私を遊びに誘ってくれた友人達。私に関わって下さった全ての方に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

4月からは、地元の病院で研修医として働く予定だ。忙しい中でも、新しいことを知る喜びを忘れずに、良医になれるよう精進したい。



看護学専攻

松下 未来

大学生活を振り返って

入学してから4年が経ち、卒業の時を迎えようとしています。宮城で生まれ育った私は、慣れない弘前という土地での生活に対する不安と新たな人達との出会いへの期待を抱え、入学式を迎えたことを覚えています。

幼少期から看護師になることが夢だった私は、大学に入学し看護についてより詳しく学べることに大きな喜びを感じました。看護について学んでいく中で、「自分がどのような看護師になりたいか」や「看護する上でどのような力が必要であるのか」を具体的に考えるようになりました。臨地実習では、患者さんとのコミュニケーションに対する難しさや自分の力不足を感じることも多くありました。上手くいかず悩むこともありましたが、その度に先生方や友人に支えられて乗り越えることが出来ました。

4月からは大学4年間を過ごした弘前で看護師として働きます。大学生活を通して多くの人に支えられていることを実感しました。たくさんの方への感謝の気持ちを忘れずに、大学生活を通して得た学びを大切にしながら社会に貢献できるように頑張っていきます。最後になりますが、大学生活でお世話になった先生方、大学関係者の皆様に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



理学療法学専攻

森 友香

人として成長できた4年間

大学入学最初のクラスミーティングで異例の女子の少なさを知りました。あのときの衝撃を今でも忘れられません。内気な性格だった私はかなりの人見知りで、人とのコミュニケーションも少し苦手でした。ましてや男子とまともに話したことがない私にとって絶望的な状況で、4年間うまくやっていけるのか、とても不安でした。最初は全く会話できなかったのですが、授業でのグループワークや、塾講師でのアルバイト経験を通し、少しずつ人との関わり方を知り、人見知りを克服することができたと思います。それからは人と話すことが楽しいと感じ、大学生活もより充実したものへと変わっていきました。

この大学生活がなければ、今でも人の優しさ、温かさを知ることができなかったと思います。様々な困難を乗り越え、人として大きく成長することができ、かけがえのない4年間になりました。この素敵な地で長い時間を共にした仲間と離れることはとても寂しいですが、これからは医療従事者として、これまで学んできた知識やスキルを生かし、社会に貢献できる立派な社会人を目指して、日々精進して参ります。

最後に、ご指導してくださった先生方、支えてくれた友人や家族、お世話になった全ての人に感謝の気持ちでいっぱいです。今まで本当にありがとうございました。



作業療法学専攻

的場 大地

成長の4年間

緊張の合格発表から休む間もなく、引っ越しなど新生活の準備に追われ、バタバタした春も今となってはとても懐かしく思います。

大学生活における4年間では、たくさんの新しい出会いや貴重な経験を得ることが出来ました。入学したての頃は、大学でははじめての人たちに囲まれ、家に帰った後は慣れない家事に追われ、この先4年間本当にやっていけるのかと不安になっていました。ですが、そのような不安は必要なかったみたいです。周りの同期たちはユーモア溢れる素敵な人ばかりで、毎日が笑いで満ちていました。

そんな中、大学3年の春に突如現れた新型コロナウイルスの感染拡大により、授業は慣れないオンラインでの実施となり、家から出ることの出来ないストレスや将来への不安に襲われましたが、同期たちと互いに励まし合い、その後の臨床実習や卒業研究など、多くの場面无事に乗り切ることが出来ました。

あっという間の大学生活を終え、4月からはまた新しい舞台での生活が始まりますが、この4年間の貴重な経験を糧とし、自分の選択した道で活躍していけるように今後も精進して参ります。

最後に、お世話になった皆様方に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



電子情報工学科

松本 雄大

羅針盤

4年前、地元岩手を旅立つ手前、父と食事をした。場所は「羅針盤」というレストランだった。

「お前は今まで充分勉強した。大学ではとにかく遊べ！」

父は大学がどんな場所なのか、よくわかっていない。かくいう自分もよくわかっていなかったの、この父の世迷い言を真に受けた状態で、大学生活を迎えることになる。そこからは、寄り道してばかりの4年間だった。大学生協の新入生サポートセンターでの活動は大きな寄り道の1つ。そこでは、4年間を通して、多くの仲間や多様な価値観と出会った。

“自分はどんな人間で、どの道を進むべきなのか”を知ろうにも、高校までの人生経験では乏しすぎたような気がする。大学に入ってから4年間では、多くの寄り道をするなかで、自分なりの価値観を確立できた。この価値観は、進むべき道を示してくれる“羅針盤”となるだろう。

多くの方からの薫陶を受け、今の自分がある、この羅針盤がある。全ての出会いに感謝したい。

羅針盤を手にしたのはいいものの、寄り道のしすぎで学修の方は散々なものに。

——反省の念を胸に、春からは大学院に進学します。先生方、引き続き、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。



理工学専攻

小野 皓多

自分自身と向き合った6年間

「若い時の苦労は買ってでもせよ」とはいいですが、今振り返ると大学生活での様々な苦い経験は、確かに将来に生きるものばかりでした。

大学ではアルバイトや就活など、様々な場面で価値観の違う人や年の離れた人などとお会いすることがあります。高校では気の合う仲間とだけ関わってきた私はそこで辛い思いをすることもありましたし、挫折も経験しました。そのようなときに大切なのは「仲間」と「人生の軸」だと思います。夢をあきらめても立ち直って納得できる進路に進むことができたのは、支えてくださった方々がいたことと、自分はどのような人生を送りたいのかという目的を明確に持っていたことが大きかったです。今では、社会に出る前に様々な人にいかに出会えるかが、大学時代にしておくべき重要な経験であると思います。

また、高校までのように課題を出されたり、指示をされたりし、それに従うことが当時は窮屈に感じていましたが、それほど楽なことはないと今は思います。自由な時間を無駄にするか、自己研鑽のための有意義な時間にするかは自分が選択できるがゆえに、日々自分の弱さを身に染みて感じる大学生活でした。

最後に、大学での貴重な6年間の経験は誰でもできることではありません。大学に通わせてくれた親、支えてくださった友人や先生など、たくさんの関わった方々に感謝申し上げます。

さらば、弘前



安全システム工学専攻

雨澤 勇太

はじめて弘前に来た時の朝をよく覚えています。受験当日、早朝に目が覚め窓の外を見ると、薄明の中に岩木山が見えました。雪景色の平野に凜と佇む成層火山の堂々たる姿に私は圧倒され、心を奪われました。生来の関東平野民であった私にとって、弘前は全く未知の遠い場所でした。しかし、引越しの日、母に見送られ父と未明の東北道を北上した時の私の胸中は、不安より期待と高揚感に満ちていた気がします。気候や文化が大きく異なる北の城下町に漠然と憧れていたのかもしれませんが。

学部時代は興味の赴くままに様々なことをする時間がありました。鬱屈とした受験勉強から解放され、何もかもが新鮮でした。特にクラシックギターという生涯の趣味を得ました。大学院に進学してからは、静かな環境で研究に没頭することができました。弘前は地理的にやや閉鎖的ですが、むしろこのことが私の積極性と行動力を鍛えてくれました。四季折々の表情が色濃く文化豊かな環境で、よき友と、よき師に恵まれ、学問と趣味に打ち込んだこの9年間は、私にとってかけがえのない財産です。末筆ですが、お世話になった方々に厚く御礼申し上げます。さらば、弘前。



食料資源学科

吉岡 龍一

自分の世界が広がった4年間

大学での4年間は自分が何に興味があるのかを知ることができた期間でした。例えば趣味について。弘前の見事な桜の写真を撮りたいと思ったのがきっかけで一眼レフカメラを買いました。それ以来、毎年のように桜と紅葉の時期は弘前城に行くようになり、どこかへ外出する際は風景を撮るようになりました。自由な時間が多い大学生の時期だからこそ気付けた興味でした。

学業面では、専門教科の他に学芸員の講義を受講しました。学芸員の視点から博物館を見ると、展示の裏で様々な準備・工夫がなされていることがわかりました。おかげで今まで以上に博物館に興味を持ち、様々なテーマの展示を見に行くようになりました。直接将来に役立つかは分かりませんが、自分の世界を広げる手段を手に入れることができた講義でした。

その他、海外研修や1人暮らしを経験することができ、充実した4年間でした。自分の興味を見つける環境を与えてくれた教職員をはじめとした大学関係者の皆様、友人、そして両親に感謝いたします。本当にありがとうございました。

来年度からは大学院に進学する予定です。研究も含め、今までの関心事をより深めることで自分の世界を広げる2年間にしていきたいです。



国際園芸農学科

西村 湧美

大学生活を振り返って

4年前を振り返るとセンター試験に失敗した上、インフルエンザにかかり、焦りと緊張を抱えながら二次対策をしていたことを思い出します。あれから早いもので卒業を迎えることとなりました。

大学生活では忙しさから愚痴をこぼす日もありましたが、遊びに勉強に社会勉強にと全てに力を注いで取り組めたと感じます。サークルでは活動日以外にも個人で集まり、朝6時からテニスをするといったサークルとは思えない(?)活発さで学年関係なく楽しく過ごすことができました。2年間の酒屋でのアルバイトでは、接客業務を通し、お客様対応や商品陳列、贈答品の包装など小売業に対する理解が深まり働くことへのイメージがより明確になりました。研究室では学会発表を通して、自分の知識の乏しさや相手への伝え方の難しさという点で今後の課題の発見に繋がりました。

4月からは大学院生としての生活が始まります。ここからの2年間は、研究と将来について考えながら「やらない後悔よりやる後悔」の精神で自分が納得できる道を選び行動したいと考えています。新型コロナウイルスの影響で制限された生活になってしまいましたが、早い収束を願って社会人になる同期との再会を楽しみにしたいと思います。



農学生命科学専攻

山口 健太朗

卒業にあたって

故郷を離れ弘前大学に入学してから6年が経とうとしています。振り返ると弘前で過ごした時間の長さに驚きますが、それと同時に“あっという間に過ぎていった”そんな不思議な感覚も覚えます。

大学生活の中では多くのかけがえのない時間を過ごすことができました。将来のこととも考えず遊び呆けたこともありましたが、自分の出した研究結果に感動し眠れない日も過ごしました。ある時には友人たちと一緒にお酒を飲み、ごはんを食べ、疲れを癒しました。そんな友人たちと他愛もない話で笑いあったことは良い思い出です。楽しいことも大変なことも弘前大学に入学しなければ出来なかった経験を沢山積み重ねていただきました。この大学で経験したすべての出来事が今の自分を形作り、これからの自分の支えになっていくのだと思います。

これからも大変な時期が続くかもしれませんが、それでも後輩の皆様が充実した時間を過ごせたと思える日が来ることを心から願っています。また常日頃、私を教え導いてくれた先生方や心の支えとなってくれた家族、同期、先輩、後輩など大学生活の中で出会ったすべての人に感謝いたします。この地で得た経験があるからこそ春からは社会人として精進していけます。本当にありがとうございました。

退職にあたって

退職教職員のこぼれ



教育学部
家政教育
教授

北原 啓司

「まち育て」はエンドレス

弘前大学に来て28年。およそ一万日の幸せな時間の連続だった。「まち育て」を研究テーマに様々な地域を学生と駆け回っていく中で、様々な方々に学生共々育てていただいた。最初に弘前市から受託した煉瓦倉庫の活用計画では、附属小児童にも参加してもらう本格的なワークショップを実施し、それが現在の弘前れんが倉庫美術館の登場につながった。大館、角館、村山、米沢、須賀川、いわき、石巻、北上、紫波、大船渡、宮古、新発田、長岡、杵築、松江、函館、芽室、黒石、十和田、八戸、青森、そして弘前。私と学生とを育ててくれた街をあげると、止まらなくなってしまう。

教育学部に赴任したからこそ、心に決めたことがあった。学生たちに「教える」のではなく、一緒に「学ぶ」人でありたい。だから、どこにでも連れて行った（海外も、露・英・米・韓・台）。「先生」は教える人ではなく、先に生まれた人だから、先に疑問を感じるし、先に調べに行くんだということを、身を以て実践するしかなかった。

自分の子育てはあまり褒められたものではないが、学生たちは見事に育っていった。関わった地域の皆さんも、着実に育っていき、そしてまちが育っていく。まさに今、一番面白い時期がやってきている。だから、これからも、学び続けていこうと思う。



教育学研究科
教職実践専攻
教授

敦川 真樹

充実した5年間

青森県内・県外の特別支援学校等に勤め、退職後教職大学院スタート時から5年間お世話になりました。当初は、教職大学院の運営全般について、時間をかけて細部にわたって先生方で話し合ったことが思い出されます。今それが生かされていると思います。

令和2年度、教職大学院に「特別支援教育実践コース」が新たに設置されました。コース設置に当たり、平成29年度3月に、当時すでに開設していた「岐阜大学」「横浜国立大学」「岡山大学」等を訪問調査し、その準備に当たらせていただきました。現在特別支援学校教諭専修免許状の取得が可能となりました。担当する中で、たくさんの方々にアドバイス、支援をいただいたことに感謝したいと思います。

最後に、地域活動「にじいろのたね」（障害のある子どもと保護者、ボランティアの会）に参画して16年になります。少子化、人口減少が進む中、支援を必要としている子どもと家族を支える活動について、「ムーブメント教育で紡ぐ子どもと家族と地域のつながり」と題して、関係する皆さんの協力により、昨年8月、全国の方々にご報告できたことを感謝しております。

この充実した5年間、皆様に御礼を申し上げます。ありがとうございました。



医学研究科
麻酔科学講座
技術職員

三木 いづみ

退職にあたって

弘前に生まれ育ち、昭和59年に弘前大学医学部薬理学講座に就職してから38年が経ちました。その間、昭和・平成・令和と時代が移り変わり、りんご台風や東日本大震災、最後にはコロナ禍も経験しました。弘前の街並みも随分変わったことを感慨深く思います。初めての薬理学の学生実習で、マウスに噛まれ絆創膏を貼った手で学生に指導したことも懐かしい思い出です。途中、麻酔科に移動になり、基礎と臨床の違いに戸惑いながらも周囲の皆さまに支えられながら今日まで来ました。今にして思えば、“人間万事塞翁が馬”の諺のように、不運に思えたことが幸運につながったり、その逆も然りで、人生において何が良く何が悪いのか、本当に後になってみないとわからないと感じています。とにかく“今ここ”に意識を向けて、自分に出来ることを一生懸命にやってきました。無事に定年まで勤められたのも、ひとえに弘前大学の教職員の皆さまの助言や励まし、力添えがあったからこそと感謝申し上げます。長い間、本当にありがとうございました。



保健学研究科
総合リハビリテーション科学領域
教授

石川 玲

退職にあたって

弘前大学教育学部を1979年に卒業し、1980年に進路を変更して医療技術短期大学部（医短）に開設されたばかりの理学療法学科に再入学しました。理学療法士の国家資格取得後は、臨床で働いた4年間を除き、弘前大学で35年間理学療法士養成教育に携わってきました。

医短の教員時代の思い出として、クラス全員（20人程）を自宅に招いてのコンパ、岩木登山、キャンプなどが蘇ります。保健学科改組後は、管理運営業務が次第に増え、大学院の夜間授業も始まり、学生と交流する時間が激減しました。これに新型コロナ禍が拍車をかけ、このまま現在の在校生のことをあまり知らずに退職することが残念です。教員生活最後の7年間は、障害のある学生の修学と生活を支援する学生特別支援室の立ち上げと体制作りに関わりました。医学的リハビリテーションを専門とする者として、障害のある学生の教育的リハビリテーションともいえる業務に携われたことは視野を広げる貴重な経験でした。

最後に、学生・大学院生として13年間、教員として35年間を過ごした弘前大学には「感謝」の言葉以外見つかりません。また、これまで私を育て、導き、いつも助けてくださった恩師、同僚、事務職員の方々に心より感謝申し上げます。長い間、ありがとうございました。



理工学研究科
教授

渡辺 孝夫

幸せな時間

私は24年間の会社勤めを経て、2006年に弘前大学に赴任しました。理工学部には物理学科（現、数物科学科）が発足した年でした。早いもので、16年間お世話になったことになります。授業というものをしたことがないのに、いきなり本番で学生の前に立つということで、かなり緊張しました。最初の3年間くらいは、上手く行くはずもなく、講義のあとには反省点が山積みでした。しかし、毎年少しずつ改善していくにつれて、進歩も実感できるようになると、授業も楽しいものへと変化しました。

研究は、会社員時代に取り組んでいた「高温超伝導の仕組み」を調べることです。私は、「新しい結晶には新しい物理が宿る」をモットーに、他所では出来ない単結晶を作ることによって超伝導の仕組みに迫ろうと考えました。運良く、幾つかの大きな成果を挙げる事が出来ました。感じたのは、「自然というものは、つくづく多様で奥深い」ということです。そして、自然はそうありたいと望むように条件を整えば、予想外の仕事をしてくれるということです。

あっという間の16年間でしたが、学生の皆さんと夢中になって研究に取り組めたことは、今にして思えば、この上なく幸せな時間だったと思います。このような機会を与えて下さった弘前大学の皆さんに感謝します。そして何よりも、困難な実験を最後まで諦めずにやりぬいてくれた卒業生の皆さん、ありがとうございました。



理工学研究科
教授

野尻 幸宏

弘前大学での講義

2015年4月に国立環境研究所から着任し、7年間を過ごしました。2月1日に最終講義を実施し7年間を振り返る機会になりました。研究所での34年間に、大学での3回ほどの分担講義は引き受けても、15回を一人で講義したことはありませんでした。研究機関から移られた先生方は、皆さん講義の準備が本当に大変だと思います。私も、学科と大学院で3つの15回講義、他に分担講義、実験実習がありその準備は大変でした。それでも、自身が重要だと思う気候変動に関するアウトリーチ活動として、2年目から教養教育の講義を始めました。「気候変動と現代社会」という科目名で国連の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）報告書の要約を全部読みます。ちょうど、2013-14年の第5次報告書公開の直後でしたので、その和訳をテキストにしました。初年度は100名、その後は200名前後の学生が聴講する人気講義になり、6年間の聴講学生数は1000名を超えました。この講義で多くの学生に気候変動問題の本質を理解してもらったことが、大学の活動中、一番良かったことだと思います。最終講義は「気候変動という不都合な真実－21世紀をどう乗り切るか」というタイトルで、今世紀の世界の対応が22世紀以降の世界を決めるという話です。（動画サイト：https://www.youtube.com/watch?v=_uLrlyPwWTY）



理工学研究科
教授

今西 悦二郎

弘前での研究生活を振り返って

36年間務めた会社を定年退職した後、弘前大学に赴任してから5年が過ぎました。会社では、研究の範囲が限られていたため、大学の教員を目指して一念発起し、理工学部でお世話になることになりました。大学では、研究テーマを自由に決めることができ、世の中で注目され始めていた建設機械のロボット化に取り組み、科研費も獲得できるなど、充実した研究生活を送ることができました。また、週末には弘前公園を散策し、春には満開の桜、夏には蝉しぐれ、秋には燃えるような紅葉、冬には雪灯籠など、四季の移ろいを感じながら楽しい日々を過ごすことができました。ただ、この2年間はコロナ禍によって、行動が制限されるなど、我慢の時期があったことは残念でした。素晴らしい教職員に囲まれ、恵まれた環境で教育研究に携わることができたことに、深く感謝申し上げます。また、楽しい時間を一緒に過ごした学生の皆さまにも感謝します。弘前大学のさらなる発展と皆さまの御多幸を祈念いたします。



理工学研究科
教授

村田 裕幸

退職にあたって

国立研究機関を退職後、本学に5年間お世話になりました。これまで一度も訪れたことがなかった土地、大学教員という未経験の仕事、単身赴任という初めて尽くしの生活を始めた当初は不安だらけでしたが、どうやら大過なく任期を全うできそうだと思って、今はほっとしています。

前の職場で研究三昧の生活を送って来た私が本学での5年間で感じたことは、若い人に「教える」ことの難しさと楽しさです。前の職場でも若い同僚や部下を指導することはありましたが、振り返ってみると、彼らに対しては「いちいち細かい指示を出さなくても、そんなことは言わなくても分かるでしょ？」という、(同じ価値観を共有している)ある種の安心感があり、彼らに教えるのに何の苦労もなかったことに気がきました。

本学では、学生諸君に学問の面白さ・研究の魅力を伝えるため、講義を担当した「流体力学」では、自分の経験不足をカバーできるよう、スライド・配付資料については出来る限りの準備をして臨んだつもりでしたが、学生の反応が私の予想よりも薄く、「うまく伝えられなかったか..」と自分の力不足を痛感することが多々ありました。一方、学生から「先生の講義は分かり易かった」という感想を聞かされたり、ざっくばらんな席で学生が自身の研究に熱心に取り組んでいる様子を聞いたりするのは非常に愉快的な経験であり、若い人の成長の目覚ましさに驚かされたりもしました。

私がどれ程、本学のお役に立ったのか、心許ない限りですが、私が弘前で色々な活動や経験ができたのも、周りの方々に支えられてきたお陰であり、最後になりましたが、皆さんから賜ったご厚情に感謝いたします。どうもありがとうございました。



農学生命科学部
食料資源学科
准教授

赤田 辰治

退職にあたって

父の郷里が青森市にあり、私も中学生の頃には岩木山スキー場に来たこともあることから、赴任当初から弘前には親近感がありました。平成5年、配属先の遺伝子実験施設は新設が認められたばかりで、しばらくは農学部育種学教室に居候することとなりました。当時の学生はまつりごとの好きな連中が多く、先ずはその楽しい洗礼を受けることとなりました。

新設の建物が完成しその4階に居を据えたころ、当時の施設長兼育種学教室の教授がぶらりと研究室にあらわれて言うには「赤田さん、あんた白山山地のブナをやらないかね。」この一言で私の研究内容は大きく舵を切ることとなりました。それからはや30余年が過ぎ、白神のブナには随分と慣れ親しんだのですが、研究の進捗はまだまだ山麓をうろつくが如し。ただ、これからも体力の許す限り現地を訪れることを楽しみにしています。

これまでにわかったこととして、ブナの遺伝子は人間同様に多様性が高く、全ての木が異なる個性を持つ。また、地球温暖化が進むにつれてブナ林は山の高みに移動するか北へ向かうかを運命づけられている。それでも、中には暑さを好む遺伝子が顕在化するかも知れず、どこまでそれを見届けられるのか、まだまだ先は長いと感じています。



農学生命科学部
国際園芸農学科
教授

荒川 修

退職にあたって

1986年6月に着任して以来、主にリンゴを材料に研究や学生の研究指導を行ってきました。研究を進めるうえでは、附属藤崎農場で良く管理されたリンゴ樹を材料に使えたことが大変助かりました。さらにリンゴ農家との交流は研究で大変プラスになりました。リンゴの研究をするには大変恵まれた環境でした。職員組合や大学生協の活動を通じて学部を越えた様々な先生方と知り合い、大学のあり方や教育のことを考えさせられました。当時は今と違って小講座制で学科の組織も強く、講座・学科内の先生方から教えられることも多くありました。小講座制は確かに悪い面もありましたが、複数の教員が学生に関わる点や若い教員のためには良かったと思います。在職中に何度か組織改編があり、今は以前のような組織はほとんどなくなり、旧来の学科や講座の名前も変わってしまいましたが、農業の現場や社会の見方は変わっておらず、学科の名前や研究分野の編成を変えるたびに世間からはわかりにくくなったように感じます。大学院を出て直ぐに助手になったので研究でも教育でも未熟でしたが、多くの人と交流し、支えられて研究と教育を続けることができました。長い間ありがとうございました。



農学生命科学部
附属白神自然環境
研究センター
教授（センター長）

石川 幸男

ブナ林、溪流、リンゴ、三味線、 目くるめく白神弘前生活でした。

私は2011年4月に、北海道から当時の白神自然環境研究所に着任しました。白神山地は、環境変動下における中緯度冷温帯のモニタリングサイトの役割を世界自然遺産の「顕著で普遍的な価値」として認められていることから、植物群落のモニタリング地点の設定に取り組みながら、樹木の長期成長動向の解明も行いました。調査の折には四季折々のブナ林や沢歩きを満喫しつつ、本当に日本で一番おいしいリンゴ、魂揺さぶる津軽三味線、そして雪の街のきわどい交通事情も、11年は瞬間に過ぎた気がします。フィールドを駆け回りつつ、同僚と共同で生物標本コレクションも充実させながら、これら事業の成果を地域にお知らせする取り組みに忙しく、そして楽しく過ごして、無事、定年を迎えることができました。北海道の自然が身に沁みついていたはずが、いつの間にか、森林といえばブナ林になっていて、退職後に白神を離れる寂しさを痛感しています。

我が国の大学の中で世界自然遺産に直接に関わる名称や役割を持った組織は、他にありません。当センターのこの特徴を今一層ご理解いただき、今後とも皆様のご支援をお願いするとともに、弘前大学と皆様のさらなる発展をご祈念申し上げます。11年間、本当にお世話になりました。心より御礼を申し上げます。



医学部附属病院
事務部長

村市 悟

定年退職を迎えて

早いことに5回目の寅年を迎えることになりました。ということは年男の私は年度末で定年退職となるわけですが、実際のところあまり実感がわかないというのが本心です。振り返れば、弘前大学に採用され最初の勤務地は農学部附属農場金木農場でした。そこから私の弘前大学勤務の歴史がスタートしたわけですが、40年もの長きにわたり勤務するなかで、予想もつかなかったことがありました。一つは国立大学の法人化です。公務員として採用され、まさか法人化されるとは想像も出来ませんでした。何が変わるのか不安のなか法人化の準備を進めていたことが思い出されます。二つ目は現在も継続している新型コロナウイルス感染症です。最後の職場となる医学部附属病院の2年間は新型コロナウイルス感染症とともに過ごすことになりました。これまで経験したことのない状況に困惑しながらも、医学部附属病院一丸となり対応した2年間となりました。人生は予測できないから面白いと言いたいのですが無理のようです。

弘前大学勤務の40年間にわたり、非力な私は多くの人に助けられ、どうにか定年を迎えられることが出来ます。この場をかりて感謝申し上げますとともに、これからも弘前大学の益々の発展を切に願っております。



附属病院看護部
副看護部長

大高 奈奈子

定年退職を迎えて

昭和58年4月に附属病院に入職し、以来39年間大変お世話になりました。これまで育ていただき、支えていただいた皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。

最初の配属先は旧第3内科病棟でした。学生時代に実習でお世話になった看護師に憧れ希望通りの配属でした。とにかく仕事を覚えるのに必死で苦労しましたが、先輩方に優しく丁寧に指導していただき、自分も先輩のようになりたいと思いながら過ごしました。その後、旧第2内科病棟、手術部、整形外科病棟で勤務し、それぞれの部署で看護の楽しさ、感動、達成感などを感じながら貴重な経験をさせていただきました。

平成24年から副看護部長として総務、業務を担当しました。皆様に支えていただきながらクリニカルリーダー導入、看護の質管理、魅力ある職場づくり、仕事の仕方改革など看護部全体での取り組みを推進する努力をしてみました。失敗や反省することがありましたが、充実した日々を過ごすことができました。

コロナ禍の今、状況の変化に即対応する組織の力強さを感じる事が多い毎日で。そして、このような職場を誇りに思っております。最後になりますが、これからの弘前大学の益々のご発展と皆様のご健康をお祈りいたします。



医学部附属病院
看護部
看護部長

棟方 栄子

邂逅

弘前市に生まれ育った私。弘前大学との出会いが、素晴らしい方々と新しい知識との出会いとなり、チャレンジの連続で、学生から職員までの人生を楽しく過ごさせて頂きました。弘前大学そして出会えた皆様方に心から感謝を申し上げます。

弘前大学医療技術短期大学部看護学科の学生となり本町地区に通い始めました。様々な地域から集まった同期や学生との会話が楽しく、興味深く、地元に居ながらにして他の街に住み始めたような感覚を覚えたものです。家族と行った桜祭りには、サークルのメンバーとも行くようになり、感動の言葉を聞いては地元を誇らしく思え、今まで感じなかった地元愛も目覚めました。夏休みは過疎地域で保健活動を行い、自然に医療界へ入って行くことができました。

弘前大学医学部附属病院に就職し、看護師人生が始まりました。先輩方が患者様に優しさと思いやりの精神で、われ先にナースコールに対応し、カンファレンスでは熱く看護介入を検討するその姿に感動しました。教育面では多数の研修や学会に参加させて頂き、多くの学びがありました。他施設の方との交流もでき、更に私の世界が広がりました。得た財産を大事にしていきたいと思います。



医学部附属病院
看護部
看護部長

落合 聖子

お世話になりました

弘前大学には学生の時から42年お世話になりました。今、附属病院では新病棟再開発事業が行われています。私は昭和の古い病棟に入職し、平成元年～5年に現在の病棟に引っ越し、ここの勤務場所で終了となります。隣に新しい病棟が目を追うごとに出来てくると見ると、現在と未来が一緒になっているような感覚になります。医療の進歩は目覚ましく、手術手技の進歩で手術侵襲も少なく入院期間も随分短くなりました。ドクターヘリの導入により遠方からの迅速な患者搬送は地域医療の救命率をアップさせました。しかし生活スタイルをこんなに大きく変えた近年の感染症には恐怖を感じ、大きな混乱もありました。

職場の労働状況に関していえば看護体制は変わり、看護師も多く配属され男性看護師も数名から全体の一割程度を占めるようになりました。また、組織が同じ目標に向かい目標管理をして働くISOの導入や最近の働き方改革は、労働環境や働きやすさを確実に良い方向へと変化させていると思います。社会人として職責を自覚し、職員の皆様に助けられながら弘前大学を通して少しは社会に貢献できたかなと思います。この場をお借りしてお礼を申し上げます。長い間ありがとうございました。



医学部附属病院
看護部
副看護師長

神 敦子

『たくさんの出会い』と『ご縁』に感謝して

1983年4月に入職し、39年間勤務させていただき、この春、定年退職を迎えるにあたり心から感謝いたします。

看護師1年生は小児科病棟勤務でした。複雑な業務や膨大な量に驚きと不安の連続でしたが、先輩方の一から教えていただき、子供たちの笑顔と両手に収まるほどの極小未熟児が保育器の中で元気に手足を動かしている姿に勇気をもらいました。2001年には形成外科病棟と外来の兼任として副看護師長を拝命しました。副看護師長としての役割を担い、病棟と外来の業務を同時に習得しなければという三重の責務、また半年後には継続看護室（今の総合患者支援センター）勤務が加わり、怒涛のような1年でした。継続看護室では、医事課の方々やボランティアさんと共に勤務するという貴重な経験の1年でもありました。高度救命救急センターでは、2011年3月11日、東日本大震災を経験しました。弘前大学病院として、災害派遣医療チーム（DMAT）の派遣が決定し、医師2名・看護師2名・事務員1名の5名を福島に向けて見送ったことが思い出されます。これまでのたくさんの出会いとご縁、支えご指導いただいたみなさまに感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



研究室 紹介

探 求 心 を 育 て る



農学生命科学部
食料資源学科

西塚研究室

准教授 西塚 誠

1. 研究室について

当研究室は、2018年4月の着任と同時にできた新しい研究室であり、今年で4年目となります。名古屋から異動してきた当初は、弘前の寒さと雪に驚かされましたが、ようやく身体が慣れ始めたかなと感じております。

本研究室は、農学生命科学部食料資源学科食品科学コースに属しています。2021年度は、大学院生1名と学部生6名が在籍しており、疾患発症のメカニズムの解明を中心とした研究を精力的に進めています。学部教育としては、食品衛生や公衆衛生、分子生物学に関する専門科目に加え、薬剤師としての知識も活かし、教養教育において「薬の科学」を開講し、日頃目にする薬の作用や創薬開発研究を身近に感じてもらえるような講義を担当しています。



2. 研究内容

近年、がんの治療を中心に分子標的薬の開発が進んでいます。分子標的薬は疾患の原因に関わる特定の分子だけを攻撃できるため、従来の薬に比べ副作用が少ないと考えられています。分子標的薬の開発のためには、疾患発症のメカニズムの解明とその制御に関わるキー分子の機能を明らかにすることが必要不可欠です。そのため、当研究室では

がんの転移機構に特に焦点を当て、その分子機構の解明を目指し研究を進めています。

2-1. がん細胞の転移に重要な上皮間葉転換（EMT）制御機構の解明

がんは日本人の死亡原因の第1位であり、年間100万人近くが新たにがんと診断されていると推定されます。早期診断や治療法の進歩により、がんが原発巣に局限する時の治癒率は高くなってきましたが、がん細胞の他臓器への転移は完治への大きな妨げとなります。そのため、がん制圧のためにはがん細胞の転移を如何に抑制するかが非常に重要な喫緊の課題です。

がん細胞の転移には、原発巣からの離脱、細胞外基質への浸潤、血管内への侵入、標的臓器への生着と再増殖、といった複数のプロセスが必要です。この過程には、上皮細胞形態のがん細胞が間葉系形態へと変化する上皮間葉転換（Epithelial Mesenchymal Transition,

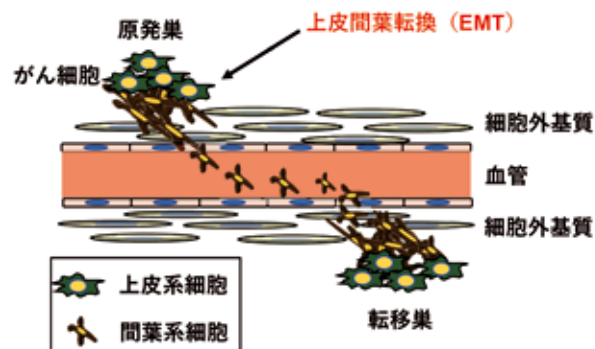


図1 がん細胞の転移と上皮間葉転換（EMT）



コントロール細胞 遺伝子X導入細胞

図2 遺伝子Xによるがん細胞の転移抑制

黒い細胞は肺に転移したがん細胞です。遺伝子Xを導入したがん細胞では肺への転移が抑制されていることがわかります。

EMT) という大きな細胞形態の変化が必要であると考えられています(図1)。近年、EMTはがん細胞の浸潤や転移だけでなく、抗がん剤に対する抵抗性惹起にも寄与することが明らかになっていますが、その制御メカニズムについては不明な点が多く残されています。

疾患発症に関わるキー分子の探索には多くのアプローチがあります。私は学生時代ならびに前任地である名古屋市立大学薬学部において、肥満形成の主たる原因である脂肪細胞の分化メカニズムについて研究を進めていました。その過程で脂肪細胞分化を促進する新規遺伝子を複数単離しました。興味深いことに、それらの遺伝子の一つが脂肪細胞分化だけでなく、EMTの制御を介してがん細胞の転移を抑制する機能を有することを見出しました(図2)。脂肪細胞分化もがん細胞のEMTも大きな細胞形態の変化を伴うという共通点を有した生命現象であることから、脂肪細胞分化制御因子に着目した新しいアプローチにより、がん細胞のEMT制御に関わるキー分子の探索を行っています。現在有力な候補タンパク質を複数見出しており、これらの機能解析を全力で進めているところです。

2-2. メラニン合成機構に関わる新しい分子機構の解明

メラニンは紫外線などの有害光線を吸収することにより、皮膚の細胞を保護する重要な役割を担っている一方、しみやそばかすの原因ともなっており、肌に対する悩みを生じさせています。紫外線や炎症などによりメラノサイトが活性化されると、メラニンの合成がはじまります。この合成過程は、チロシナーゼなどの酵素群に加え、複数の細胞内シグナル伝達経路が複雑に関与していることが知られていますが、その分子機構の全容は未だ明らかになっていません。

美白やシミ消しのための化粧品・医薬部外品等が多数



図3 遺伝子Yによるメラニン合成阻害

遺伝子Yを導入したメラノーマではメラニンの合成が抑制され、白くなっています。

販売されていますが、それらの効果については経験則に依存したものが多く、分子レベルの検討から有効性を明らかにされた成分は未だ少ないのが現状です。特定のタンパク質を標的としたものと



として、チロシナーゼの阻害効果を持つ商品が出されていますが、白斑症発症との関連性も示唆されていることから、チロシナーゼ以外を標的としたメラニン合成を抑制しうる新たな有効成分の創出とメラニン合成の分子機構の解明が求められています。当研究室では、悪性黒色腫(メラノーマ)においてメラニン蓄積を抑制する新しい遺伝子をこれまでに見出しています(図3)。この遺伝子の機能を明らかにすることにより、新たなメラニン合成制御機構の発見と美白効果が期待される商品の開発につながる可能性があります。

2-3. ニンニク外皮含有成分の新たな生理機能の解明

本テーマは弘前大学に着任してからスタートした研究課題です。ニンニクは、アメリカ国立がん研究センターが作成したがん抑制が期待されるデザイナーフードピラミッドにおいて最上位に位置する食品であり、その優れた機能が注目されています。青森県はニンニクの一大産地であることから、ニンニク含有成分の生理機能に関する研究は医療や健康増進に加え、地域経済への貢献にもつながるものと考えられます。この研究では、成分に関する研究が進んでいる可食部に加え、廃棄物と考えられていた外皮の含有成分にも着目しています。共同研究を行っている青森県産業技術センターの解析によると、フラボノイド類をはじめ予想以上に多くの成分がニンニク外皮には含まれていることがわかっています。現在、がん細胞のEMTや関節リウマチに効果のあるニンニク外皮含有物を同定すべく、細胞レベルのスクリーニングを行っています。有力な候補化合物が同定できれば、有効な資源としての価値の創出に寄与するだけでなく、新たな創薬開発にも貢献できると考えています。

3. 終わりに

食品の機能性に関する研究は、食品側からのアプローチだけでなく、疾患の発症メカニズムの側面からのアプローチも極めて重要です。当研究室では、疾患発症に関わるキー分子の探索と機能の解明を進めることにより、創薬開発や食品成分の機能性に関する新たな学術的知見の創出に貢献することをめざしています。

大学における研究の醍醐味の一つは、学生と一緒に難しい研究テーマに挑み、学生の成長を身近に感じながら研究成果を出すことにあります。これからも学生と共に愉しみながら研究を進めていきたいと考えています。当研究室の研究テーマに興味を持っていただける先生がおられましたら、ご連絡いただけると幸いです。

New Face

はじめまして 新任教員紹介

個性豊かな3名の教員が新たに着任いたしました



人文社会科学部

国際社会講座

古川 祐貴

令和3年(2021)11月に日本史教員として着任しました古川祐貴(ふるかわゆうき)と申します。着任前まで対馬という日本と朝鮮半島との間に位置する離島(長崎県対馬市)で、歴史系博物館の学芸員として働いていました。専門は近世日本の政治・外交史(特に近世日朝関係史)で、文化財・博物館・学芸員のことに興味があります。私にとって青森・弘前は未知の領域。初心に帰ったつもりで対馬の研究とともに進めて参ります。



理工学研究科

電子情報工学コース

尾崎 翔

令和4年1月より理工学研究科に着任いたしました。これまで深層学習を用いたCT画像の画質改善などの研究を行ってきました。

今後は、AIや量子情報など最先端の情報科学技術を駆使して、理工学の立場から医療・医学における様々な課題を解決していきたいと考えています。また、教育・研究を通して、学生の成長や弘前大学の発展に貢献できれば幸いです。

どうぞ宜しくお願いいたします。



農学生命科学部

地域環境工学科

矢田谷 健一

令和3年11月に着任いたしました、矢田谷(やたや)と申します。本学大学院修士課程を修了後、民間企業と地方自治体に計15年勤務し、この度の着任となりました。

主な研究対象は、河川等の横断構造物に設置される“魚道”です。河川は、人間が水資源を享受する上で不可欠な存在ですが、同時に多様な生物の生息・繁殖の場でもあります。弘前という素晴らしい地で、学生の皆さんと物事を探求していくことがとても楽しみです。



社会活動や研究活動、課外活動で活躍した学生及び学生団体を表彰する学生表彰表彰式を令和4年3月7日（月）総合教育棟2階大会議室で行いました。

今回の受賞者は、社会活動で活躍した1団体と学生1名、研究活動で活躍した学生8名で、福田学長から学生1人ひとりに表彰状と記念品が贈呈されました。

福田学長からは、学生の功績を讃え、「学生表彰の受賞、誠におめでとうございます。

また、熱心に指導いただいた先生方、苦楽を共にした仲間の皆さんにも、心からお祝いを申し上げます。

社会活動の表彰対象となりました東京オリパラにおけるホストタウン交流の推進については、本学の社会貢献の好事例であり、また、広報物制作は、本学の知名度向上に大きく貢献したと思っています。研究活動の分野では、学会発表や学術論文として、全国へ、そして世界へ発信し、本学の研究レベルの高さを証明していただきました。

社会活動、研究活動ともに、このコロナ禍という大変な状況の中で、実施、達成されたものであり、例年以上に価値があるよ

令和3年度弘前大学学生表彰を実施

うに思います。皆さん方の自信となっただけでなく、必ずや本学で学ぶ学生諸君の大きな励みとなるはずです。

もちろん、ここで皆さんの社会活動、研究活動が終わるわけではありません。残された大学生活の中で、あるいは卒業後の社会の中で、次なる高い目標を定め、さらに研鑽を積まれることを期待します」との言葉が送られました。

受賞者を代表して、保健学研究科博士後期課程2年 佐藤嘉晃さんが、「私たちの活動が評価され、こうして表彰されるに至ったのは、新型コロナウイルス感染症の流行の中、活動を支えてくださっている福田学長をはじめとする多くの大学関係者のおかげだと感じています。

この場をお借りして、感謝申し上げます。活動するにあたり、たくさんの困難や苦労がありましたが、このような榮譽ある賞を頂戴し、非常に嬉しく思います。今後も弘前大学の学生であるという誇りと自覚を胸に、大きな変化が訪れている社会の中で、より一層の躍進を目指して、精進して参ります。」との謝辞を述べました。

【団体】

- 社会活動で特に顕著な功績があった団体
弘前大学柔道部

【個人】

- 社会活動で特に顕著な功績があった学生
教育学研究科 2 年 土 屋 牧 子
- 研究活動で特に顕著な成果を挙げた学生
- | | |
|------------------|-------------------|
| 保健学研究科博士後期課程 2 年 | 佐 藤 嘉 晃 |
| 理工学研究科博士後期課程 3 年 | NICHABOON CHAIHAD |
| 理工学研究科博士後期課程 3 年 | 王 佳 佳 |
| 理工学研究科博士後期課程 3 年 | 王 超 |
| 農学生命科学部 4 年 | 石 橋 沙 季 |
| 農学生命科学研究科 1 年 | 念 代 周 子 |
| 農学生命科学研究科 2 年 | 森 井 椋 太 |
| 地域共創科学研究科 2 年 | 野 崎 未 紗 |

2021年度がそろそろ終わりを迎えようとしています。私事ですが、今年度も学会がオンライン開催となり、弘前を出る機会がほとんどありませんでした。また節目の行事も中止になったため、季節の移ろいを感じる事ができない1年でした。その原因は言うまでもなく、新型コロナウイルスです。昨年度に引き続き、今年度も翻弄された1年でした。卒業生・修了生の皆さんは「三密防止」の下で自由に研究ができなかったことでしょう。さらに就職活動も加わり、本当に大変な1年でした。その他の学生の皆さんもつらい1年だったと思います。とくに新入生の皆さんは慣れない環境へ放り込まれ、メディア授業への対応に苦慮した1年でした。教職員におきまし

編集後記

ても、コロナ禍対応に明け暮れ、マスク着用の上ストレスフルな1年でした。そのような状況下で夏には弘前大学主導のもと「新型コロナウイルス接種」が一斉に実施されました。この編集後記を書いている2月末でも猛威を振るっています。感染拡大防止のため、1月中旬にはメディア授業が後期終了まで延長され、弘前では「まん延防止等重点措置」が適用されてしまいました。この学園だよりが発行される頃には、弘前大学でも3回目の新型コロナウイルス接種が始まっていることでしょう。来年度こそは三密を気にせず、自由に移動や会食ができる日々に戻ってほしいですね。まずは弘前城で花見ができるかどうか・・・できたらいいなあ。

（農学生命科学部 千田）

これまでの大学への貢献について

弘前大学と弘前大学生協は以下の業務委託に関する契約を締結（2004 年～）しています。

●福利厚生業務（学研災・学研賠業務含む） ●教育支援業務

●研究支援業務 ●その他大学業務

日頃より弘大生協のご利用ありがとうございます。校費（パソコン、書籍、家電等）や出張手配・旅費精算業務など、さまざま教職員の皆さまの研究サポートをはじめ、食事や住まい、こころの支援等、学生の日常生活のサポートに取り組んでいます。

特にコロナ禍においては、弘前大学とともに「学生生活支援」を行って参りました。

■コロナ禍における弘前大学学生支援活動サポート



- ・ 100 円昼食・夕食の提供
- ・ 大学発「地域振興券」の販売支援
- ・ 全課外活動団体に対する感染防止費給付支援
- ・ 青森県 15 市町村の地元産品を活用した食支援プロジェクト
- ・ りんご試食会 ほか



他にも経済的理由により修学が困難な学生が活用していただける奨学金として、300 万円を寄付しました。

引き続き、これからの社会を担う人材を、地域に、世界に送り出す弘前大学に協力し、教職員の皆さまの研究サポートと、学生組合員の生活、学びと成長の支援を進めていきます。



■学生総合共済加入者専用 学生生活無料健康相談テレホン



学生生活無料健康相談テレホンは、学生総合共済加入者のためのサービスであり、多くの学生や保護者の方にご利用いただいています。学生・保護者の皆さまより、深刻なものから急ぎのものまで、たくさんのご相談をいただいております。

予約不要で 24 時間 365 日、無料でご相談できる点や長引くコロナ禍で友達が作りづらい、交友関係が広がらず相談できる相手がないといった状況で、「学生に必要なサポート」として福田学長より落ち着いた目に入りやすい大学会館内トイレへ掲示していただいています。



弘前大学
学園だより

vol.203 / 2022年3月発行 題字：福田眞作 学長

編集：国立大学法人弘前大学「学園だより」編集委員会

委員長：高瀬 雅弘（教育委員会）

委員：林 彦櫻（人文社会科学部）

丹治 邦和（医学研究科）

江居 宏美（理工学研究科）

高松 達典（学生課）

田中 拓郎（教育学部）

則包 和也（保健学研究科）

千田 峰生（農学生命科学部）

坂本 桃子（学生課）

印刷：コロニー印刷



弘前大学

検索

トップページ ▶ 弘前大学について ▶ 広報 ▶ 刊行物・広報誌 ▶ 学園だより
バックナンバーをご覧ください。

学園だよりに関するご意見がございましたら、下記のアドレスまでお寄せ願います。

弘前大学学務部学生課 e-mail:jm3113@hirosaki-u.ac.jp